

副詞的に機能する形容詞

——「明るい声で叫んだ」——

八 亀 裕 美

1. はじめに

本稿は、規定語になっている形容詞が、実際には名詞のさしめしを詳しくしているのではなく、修飾語など副詞的に機能する場合について、用例から帰納的に記述することを目的としている。この点については、すでに八亀(2004, 2008)などでもその概略を指摘しているが、本稿はそれをさらに精密化したものである。

最初に、形容詞の文中での機能について、その基本的な立場を振り返っておく。

従来から指摘があるように、主要な品詞の文中での特徴的な機能は以下の通りである。ここでは後で確認する鈴木(1972)の用語を用いて示す。

名詞＝主語, 対象語

動詞＝述語

形容詞＝規定語

副詞＝修飾語

このように、形容詞を他の主要品詞から弁別する特徴的な性質は規定語として(連体修飾成分として)機能するところにある。これは一般言語学でも確認されている周知の事実である。

また、形容詞は述語として機能する場合もあり、第一形容詞(いわゆる形容詞)も第二形容詞(いわゆる形容動詞)も日本語の場合は単独で述語になることができる。このことも日本語だけではなく、広く世界の言語でも確認される。(Dixon and Aikhenvald 2004 など参照)

八亀(2004)では、Thompson(1988)などに従って、日本語の形容詞の文中での機能を整理し、規定語となる場合と述語となる場合について、詳細な記述を行い、テキストタイプと形容詞の主たる機能の関係についても提言をおこなった。

本稿は、その段階では周辺のものとして扱っていた次のようなタイプをより詳細に記述する。

・彼は明るい声で叫んだ。

このような場合、「明るい」という形容詞は、一見

「声」という被修飾名詞を修飾する規定語として機能しているように見えるが、実際は「明るい声で」全体で「叫んだ」という動きの「さま」をより詳しくしており、修飾語として副詞的に機能している。「明るく叫んだ」と言い換えることも可能である。形容詞のかざりが名詞を詳しくしていないことは、形容詞だけを削除してみると、非文になることからわかる。

*・彼は声で叫んだ。

テキストタイプとの関連で言うと、このように副詞的に機能する場合は小説の地の文などの創作的な書き言葉を中心に見られる。一種修辭的な用法であり、基本的な用法の外側に、臨時的・創作的な用法として存在している。形容詞論全体から見れば、かなり特殊な領域であるが、小説などのテキストタイプの中では、大事な役割を果たしている。

用例の収集にあたっては、手拾いで文庫本から集めている。また、作者による修辭技法の偏りを考え、多くの作家の作品を取めた傑作短編集などを積極的に調査対象としている

以下、八亀(2004)、(2008)での指摘を簡単に振り返り、さらに詳しい記述を進めていく。

2. 本稿の立場

筆者の研究は、基本的に奥田靖雄を中心とする言語学研究会の文法論の枠組みに沿っている。本稿で問題となる文の成分論についても、鈴木(1972)などの考え方に即している。

これについては、八亀(2008: 48-49)でも確認をしているが、ここでもう一度繰り返しておく。文の成分としては、以下をみとめている。このまとめは、鈴木(1972: 61-125)、工藤(2000: 130-131)を参考にして簡潔にまとめている。詳細な議論については、鈴木(1972)を参照していただければ幸いである。

(1) 主語：述語が表す属性のもちぬしを表す文の成分。

(受動文のような有標の文を除く)

- (2) 述語：主語と対になり、主語の属性（動作・変化・状態・特性・関係・質）を表す。陳述の核となる文の成分。
- (3) 対象語：述語が表す属性の成立に必要な対象を表す文の成分。
- (4) 修飾語：述語にかかって、述語が表す属性の様子・程度・量などを詳しくする文の成分。
- (5) 状況語：主語と述語が表す事象が成り立つ時間、空間、原因・理由という外的状況を表す文の成分。
(述語の属性だけを詳しくするのではなく、事象全体を詳しくする)
- (6) 規定語：名詞からなる文の成分（主語・述語・対象語・状況語）にかかり、人・もの・場所・時などの特徴を説明する文の成分。
- (7) 独立語：文が表す事象を詳しくするものではなく、話し手の態度あるいは陳述的意味を表す文の成分。

前節で確認をしたように、形容詞という品詞の最も特徴的な機能は、規定語として名詞のさししめしているものをより詳しくする、という機能である。

・赤い靴をはいていた女の子がいた。
一方で、日本語の形容詞は、単独で述語になることができる。

・となりの家の門は大きい。

この二つが形容詞の文中での主要な機能である。これは、従来から指摘されてきたことであり、また、どの言語でも同様である (Thompson 1988 など)。

もう一点、Thompson (1988) の考え方に即して、八亀 (2004) などでは一見規定語に見える次のような場合も、形容詞が述語として機能していることを指摘した。

・ピアノはすばらしい楽器です。
ピアノが楽器であることはすでにわかっていることなので、この場合、述語として聞き手に提示されている新情報は「すばらしい」という形容詞である。

このようなケースも述語として機能しているとカウントすると、話し言葉では、形容詞は述語として機能する場合のほうが、規定語として機能する場合よりも頻度が高いことも八亀 (2004) などを確認している。

このように、形容詞の基本的な機能は、規定語になることと述語になることなのであるが、さらに、形容

詞が副詞としての用法も持っているかどうか、という点が、類型論研究においても注目される点である (Dixon 2010 など参照)。日本語の第一形容詞 (学校文法でいうところの形容詞) は、第一なかどめの形 (学校文法でいうところの連用形) と同じ形が副詞的に修飾語として機能する。

・夕日が赤く輝いている。

第二形容詞 (学校文法でいうところの形容動詞) の場合は、なかどめの形は「-で」であり、副詞的に機能する場合は「-に」となる。

・孫が元気に走っている。

この点について、鈴木 (1972: 467) などでは、このように修飾語として機能している形容詞は、副詞に派生しているものとして扱っている。この点については、最後にもう一度振り返り考える。

では、鈴木 (1972) が示す立場で形容詞の文中での機能を観察すると、修飾語として機能することはないのか、というと、すでに八亀 (2008: 60-62) などでも指摘しているように、次のような場合は、一見規定語に見える形容詞が、被修飾名詞と一緒に実質的には副詞的に機能している。以下、八亀 (2008)¹⁾ で取り出したタイプを簡単に確認しておく。

<修飾語的に機能する場合>

①「～声で言う」「～目で見える」というタイプ

②「～感じで」「～顔で」「～格好で」というタイプ

③被修飾名詞が述語動詞とフレーズを形成している場合

「声を出す」「目を向ける」などのフレーズを構成している

このような場合について、詳しくみていくが、関連して以下のようなものもとりあげることにする。

<独立語の一部になる場合>

「～ことに」という形で現れる。被修飾名詞を含め、全体で独立語として話し手の評価的な態度を表す。

<状況語の一部になる場合>

被修飾名詞が時間を表す形式名詞 (なか、あいだ、とき)、または「長いこと」という形で現れる。被修飾名詞を含め、全体で状況語として事象が成り立つ時間を詳しくする。

八亀 (2008) では、形容詞が規定語として機能する場合と述語として機能する場合についての整理が中心であり、これらは周辺的なものとして簡単に記述したが、本稿ではこのように、形容詞が副詞的に機能する

場合を中心にさらに詳しく記述していく。

3. 修飾語的に機能する場合²⁾

①「～声で言う」「～目で見る」というタイプ

このタイプは、「言う」「見る」という動詞と語彙的に関連が深い「声」「目」などが形容詞の被修飾名詞となっている点が特徴的である。被修飾名詞はテ格をとり、形容詞のかざりなしでは非文法的な文となる。

<～声で+言語活動動詞>

ある程度固定的な表現になっており、使われる形容詞もかなり限定されている。

「大きな声で」は「大声で」に言い換えられる、ペアになるのは「小さな声で」で「小さく/小声で」に言い換えることができる。「大きい」「小さい」よりもその変種である「大きな」「小さな」が好まれる³⁾。

- ・おもむろに筒見が大きな声で言った。黒崎が軽く手をあげる。(短編2005:293)(=大声で)
- ・いやね、つまんねえ独り言を大きな声で言う癖があるんだよ、今日も、こんな薬なんか効かない、効くわけがないなんて煩いからね、(後略)(薄情:111)(=大声で)
- ・叔父の白いシャツの裾を引いてみたが、叔父はなにやら大きな声で叫んでいて、振り向きもしなかった。(アイロン:201)(=大声で)
- ・ありがとうございます、と綾音は小さな声で答えた。(聖女:96)(=小さく/小声で)
- ・叔父さんはどこですか。小さな声で言ったが、誰も関心を示さなかった。(アイロン:201)(=小さく/小声で)

「大きな声で」「小さな声で」の類義表現とみられるものがいくつか認められる。これらは臨時的・文学的な表現と言えるだろうか。

- ・「はい、このへんだったと思います」細い声で彼女は答えた。(聖女:39)
- ・「(前略)……はい、どうもありがとうございます」細い声でしゃべった後、宏美は電話を切った。(聖女:159)
- ・「あ、ごめん。今日、体がだるいから」か細い声で言った。(短編2005:438)

次に多く見られるのは、「低い声で」である。これは音の高さではなく、「音量を抑えて」あるいは「感情を抑えて」の意味である。ペアになるのは「甲高い声で」になる。それぞれ、「低く」「甲高く」に言い換えができる。

- ・巧成が低い声で言った。/「それでもう準備はできたのか」(短編2005:66)(=低く)
- ・「何をしていた」/と男は低い声で言った。その声は怒りに満ちていた。(短編2005:327)(=低く)
- ・そばで聞いていた康子が、まさか、と低い声で言った。その顔がこわばっていた。(短編2005:385)(=低く)
- ・「ぜんぶ、嘘だった」/ほんやりと虚空を見つめ、低い声で言う。(アイロン:262)(=低く)
- ・女が流し目で客を軽くあしらい、馬鹿、と低い声で言うと、客は鱈子にも似た唇をてからせながら、ますます好色そうに笑った。(アイロン:362)(=低く)
- ・「おう。帰ってきたな」やや疝高い声で、茶の間にいた秋夫が言った。(短編2005:298)(=疝高く)
- ・「本当ですか。すっかり諦めていました。そうですか。村に残ってくれるのですか」/早瀬は、甲高い声で言った。(アイロン:69)(=甲高く)
- ・女が台所で魚のわたを取り除いていると、足元にすり寄って来て、にやあと甲高い声で啼いた。(アイロン:369)(=甲高く)

ここまでの表現は、ある程度固定的・慣習的であるが、これらのパターンにはまらない「～声で」もいくつか見られる。ただし、生産的なのは、後で見る「～口調で」のほうである。

- ・店員さんは圧倒的に女性が多いので、それらのぬいぐるみたちはみんな可愛らしい声でしゃべり、女性の声で笑う。(短編2005:41)(=可愛らしく)
- ・最終電車だろ、電車を降りて喧嘩をしたら帰れなくなるじゃないか、そんなことは考えなかったのね、と年配の警官はいった。彼は終始、物柔らかい声で喋った。(=物柔らかく)(薄情:77)
- ・画像を見た若い医者は「わ、出血してるよ。なんか、あったの」と、気楽な声で言った。(短編2005:109)(=気楽に)
- ・「それにしてもこの国はどうなってしまうんだらうね」/と、しずかな声でつぶやいたりもする。(アイ

ロン：395) (=しずかに)

- ・「いいお休みになったわ。たまにはこんな日があってもいいわね」歩きだしながら暢気な声で光恵はいい、どんと富士山が、どんと、と繰り返した。(薄情：72) (=暢気に)
- ・婦人は嬉しそうに籠の中のものを早瀬に見せ、女たちと明るい声で言葉を交わしていた。(アイロン：57) (=明るく)
- ・「三宅さん、出身は神戸のほうだっていつか言っていましたよね」、啓介がふと思い出したように明るい声で尋ねた。「先月の地震は大丈夫だったんですか？(後略)」(アイロン：307) (=明るく)

<「～口調で+言語活動動詞」>

先に見た「～声で」と比べると臨時的な表現が多く、語彙的な限定もあまりない。傾向としては第二形容詞が多く見られるようである。

- ・「すると、昨日か今日、来客があったということになります、何かお心当たりはありますか」/断定的な口調で話す内海薫の横顔を、草薙は見た。/「来客があったって、どうしてわかるんだ？」(聖女：41) (=断定的に)
 - ・極めて事務的な口調で訊く女刑事の横顔を、草薙は思わず見つめていた。同様の質問をするつもりだったが、これほどの直接的な表現は念頭になかった。(聖女：90) (=事務的に)
 - ・「たしかに危険な方法だ。しかし彼女はやり遂げた」湯川は冷静な口調でいった。(聖女：389) (=冷静に)
 - ・(前略) 安田さんは、正直に言っていますか、といつになく真剣な口調で聡子さんに話しかけた。(アイロン：437) (=真剣に)
 - ・そんなある日、義孝から衝撃的なことを告げられた。いや、彼のほうには、それほど無謀なことを発言しているつもりはなかったかもしれない。じつに気軽な口調でこういったのだ。/「結婚して、もし一年以内に子供ができなかったら別れよう」(聖女：414) (=気軽に)
 - ・版画家は静かな口調で、女に絵の話、詩や小説の話をした。(アイロン：374) (=静かに)
 - ・「佐藤さん家、まだビデオデッキなんだ」となれなれしい口調で言った。(短編2005：424) (=なれなれしく)
- 次のように、言い換えが難しい例も見られる。どちらも敢えて言い換えるなら「淡々と」になるだろうか。
- ・「(前略) 地道にトレーニングに励むことをお勧めする」/淡泊な口調でそんなことをいう湯川の息は全く乱れていない。なんだこいつ、と草薙は思った。(聖女：330) (=淡泊に?)
 - ・ほんとうに厳しい時期にさしかかってるんですよ、と相良さんはこのところ淡い口調で繰り返すようになっていた。(アイロン：419) (=淡く?)
- ほとんどがここまでに見た「話し方」を詳しくする例だが、それ以外に「～目で+視覚活動」「～字で+書記活動」などの例が少しずつ見られる。臨時的な印象が強い。
- ・綾音が厳しい目で睨むと、義孝も真顔に戻った。彼はゆっくりと頷いた。(聖女：6) (=厳しく)
 - ・「それは、まあ、今はまだ縁がなかったちゆうことだなあ」/そう言って老人は、どこか底意地の悪そうな目で私を見て笑った。(短編2005：166) (=底意地が悪そうに)
 - ・予定よりも二週間以上早く生まれて焦ったけれども、むしろかえって安産で、母子ともに健康ですから安心してください、と満子らしい几帳面な字で綴られていた。(短編2005：473) (=几帳面に)
- ②「～感じで」「～顔で」「～目で」「～格好で」というタイプ
- このタイプは漠然と様子を表す「感じ」「顔」「格好」などのデ格名詞を形容詞がかざっている。主たる動作をしているときの登場人物の心理的な状態を描写する方法として、小説の地の文で好んで用いられる。「～げな顔で」「～そうな表情で」などの形も多い。また、連続的なものとして、「～顔をして」「～目をして」「～格好をして」という形もある。
- 先の①タイプとの違いは、被修飾名詞と動詞の間に語彙的な関係性が見られないか希薄な点にある。
- ・竹島新二はいつものこやかな顔でショーを進めていく。(短編2005：416) (=にこやかに)
 - ・「それらしき話は聞きました。でもどこの誰かは知りません。今の時代、あまり迂闊にそういったことを訊くと、セクハラで訴えられますから」笹岡は真面目な顔でいった。(聖女：317) (=真面目に)

- ・夫妻は、旧知の友人を迎えるみたいな親しげな顔で笑った。(アイロン：393) (=親しげに)
- ・私が言葉を濁すと、しーちゃんはどこか悲しげな目で言った。/「いいなあ、うっちは……実は俺、本当はもう一つ、お願いしたいことがあるんだ」(短編2005：162) (=悲しげに)
- ・啓介は不思議そうな面持ちで見返してきた。父親が見ていたように、ことごとく知っているのが解せないというふうだった。(短編2005：385) (=不思議そうに)
- ・「ほんまのことやで。……向こうのおかんが結婚を反対しとって、おれから養育費とって暮らそうって言いだしたんやと」/啓介は真剣な面持ちで言いつのった。(短編2005：397) (=真剣に)
- ・私はきょとんとしてしまった。こういったことを清水氏は必ずしも冗談とばかりはいえない生真面目な風情で提案し、夫人は夫人で、/「でも、マスコミの反発が予想されますね」/と応じたりする。(アイロン：396) (=生真面目に)
- ・人差し指を真ん中にいれておしほりの先をとがらせ、真剣な表情で染みをつついているその格好は、のみ取りをしているオランウータンそっくりで、笑い出しそうになるのを必死でこらえた。(アイロン=421) (=真剣に)
- ・その様が、たいそう気持ちよさそうな解放されたような吐きかたなので、うらやましい心もちで聞くようになった。(アイロン：216) (=うらやましく)

先にも述べたように、ここまで見てきたような被修飾名詞がデ格となる表現と連続的なものとして、「～顔をして」のようなタイプがある。

- ・「それについては同感です。水道の水を使おうが、ミネラルウォーターを使おうが、コーヒーの味に大きな違いが出るとは思えません」/真面目な顔をしていう湯川に、揶揄を込めた視線を草薙は送った。(聖女：252) (=真面目に)
- ・「子供の耳に入ると困りますので、今の話はどなたにも仰言らないでください」/堂前は、暗い眼をして言うと、村長室を出て行った。(アイロン：61) (=暗い眼で)
- ・早瀬は堂前の表情をひそかにうかがっていたが、これといった変化は見られず、堂前は、にこやかな表情をして村人の診察にあたっていた。(アイロン：61) (=にこやかに)

- ・奥の方に歩いてゆくと、背後から声をかけられた。振向くと、長身の男がにこやかな表情をして立っていた。堂前であった。(アイロン：50) (=にこやかに)

③被修飾名詞が述語動詞とフレーズを形成している場合

「声を出す」「目を向ける」などのフレーズを構成しているヲ格名詞が形容詞の被修飾名詞になっている場合は、形容詞のかざりがなくても非文にはならず、①や②とは性質が少し異なる。しかし、この場合も形容詞は名詞をかざっているのではなく、フレーズ全体が表す動きのありさまをかざっており、修飾語的に働いている。

<「声を出す」「笑い声をあげる」など>

- ・店長さんはロボットになっていた。えーとこれはガンダムですか？椅子の上の男の人は、何だろ、何か戦隊ものみたい。ターボレンジャーとかかしら。/「店長さん！」わたしは大きな声を出した。/ガンダムが振り返る。「おお、よく似合うねえ」(短編2005：42) (=大声で言った)
- ・「DVDレコーダー、ちゃんと使えるようになったわよ。裏番組の録り方もわかったし」うつもより明るい声を出す。笑顔も作って見せた。(短編2005：442) (=明るく言った)
- ・「あら、上等なおまんじゅうだ」/鰻屋の座敷で、しまうまを膝の上のせ、清水夫人は嬉しそうな声を出した。(アイロン：411) (=嬉しそうに言った)
- ・「ええ！」びっくり仰天したという大袈裟な声をあげてから、秋夫はあきれ顔を尚也に
- ・有子がたのしそうな笑い声をあげた。わたし、そういう無神経な男って大好き。(アイロン：33) (=たのしそうに笑った)

<「笑顔／笑みを浮かべる」など>

- ・「……しーちゃん……なのかい？」/私の言葉に白バイ警官は、人懐っこい笑顔を浮かべた。(短編2005：184) (=人懐っこく笑った)
- ・「……アンボンタンやなあ」/と哀しげな笑みを浮かべた。(短編2005：385) (=哀しげに笑った)
- ・薫の質問に、洋子は薄い笑みを浮かべながら顔を傾けた。(聖女：352) (=薄く笑いながら)

<「目を向ける」「視線を送る」など>

- ・「なあ、アジの酢締め、まだかいな」／玉木がカウンターから声をかけてきた。待ち遠しげな目を向けている。(短編2005:387) (=待ち遠しげに見ている)
- ・「ご親切に。そんなことを言って下さる方など殆どいらっしやらないのです」／女は窓の外に空ろな眼を向けた。(アイロン:200) (=空に見た)
- ・湯川は意味ありげな視線を内海薫に送った。(聖女:196) (=意味ありげに内海薫を見た)

<「息を吐く」「ため息をつく」など>

- ・「で……」／とほくは短い息を吐いて、聞いた。／「どうだったかね」／あれから十年経っている。(アイロン:156) (=短く息を吐いて)
- ・ビルを後にし、草薙は歩道に立った。思わず、大きなため息をついた。(聖女:372) (=大きくため息をついた)

④臨時的な表現

ここまで見てきたものは、ある程度表現として固定化が見られるが、文学作品では、これ以外にも、かなり臨時的・文学的な表現が見られる。表現としては熟してはいないが、それが創造的な表現として受け取られる効果を生んでいる。それぞれ言い換えも難しい場合があるが、いずれも形容詞は、名詞のさししめしを詳しくしているのではなく、修飾語的に機能している。

- ・直哉は反射的に大きく両手を振って、否定した。すると、デザイナーはさらに意地悪げな笑みを広げて、こう警告した。／「志津子は見境ないから、気をつけてね」(短編2005:95)
- ・「そんなことないって。大丈夫だよ、絶対」／しょげかえるしーちゃんに、私はそんな無責任な言葉を並べるしかなかった。(短編2005:159)
- ・その中で私は、ステージと客席に疑い深い目を凝らしていた。(短編2005:340)
- ・「にゃあ」と首を横に振って、オヨネン婆は依怙地な色を目に浮かべた。(短編2005:457)
- ・「矛盾といえば、若山宏美は子供を産む決心をしたそうです」／湯川は怪訝そうな目を返してきた。／「別に矛盾しているとは思わないがね(後略)」(聖女:424)
- ・「もし虚数解でなければ」彼は目に鋭い光を宿らせて続けた。「おそらく君たちは負ける。僕も勝てないだろう。これは完全犯罪だ」(聖女:269)
- ・「マッチ、元気？」／志津子のノータンキな声が耳の

中で弾んだ。(短編2005:108)

- ・みおろすと、坂の下には昔のままの石の塩川橋があり、澄んだ速い流れがにぶい光を集めている。(アイロン:24)

以上、規定語である形容詞が実際には修飾語として機能している場合について、具体的な用例を整理する形で観察してきた。

小説の地の文を中心に多く用いられるこれらの表現は、かなり固定的になっているものも多いが、臨時的・修飾的なものも観られた。副詞にパラフレーズしてみると、形容詞を用いた表現の方が凝った表現であるという印象があり、小説の地の文においては一定の役割を果たしていることが考えられる。

4. 独立語の一部になる場合

本稿の観察の中心は、3で扱ってきた規定語である形容詞が、実際には修飾語として機能している場合であるが、形容詞が副詞的に働いている場合として、被修飾名詞と一緒にあって独立語として機能している場合についても周辺のなものとして観察しておく。典型的には「～ことに」という形で現れる。被修飾名詞を含め、全体で独立語として事象全体に対する話し手の評価的な態度を表す。

- ・テレパシーを舞台にかけ、しばらくすると不思議なことに、百合子は雲斎と言葉ではない会話を交わすようになった。(短編2005:412)
- ・黒崎は隣のクラスのひよろりとした男だ。悔しいことに、去年もおとしも彼にマラソン大会の優勝をかっさらわれている。去年などは五分近く差をつけられて負けた。早い話が、黒崎のぶっちぎりだった。(短編2005:271)
- ・「間のわるいことに、目撃されとったんや、この連れにさ。……ここにゃ口止めのつもりで誘ったんやけどなあ」(短編2005:389)
- ・海に面した崖だったら、間違いなく死んでいただろう。が、幸いなことに、一瞬だけ浮いた体はすぐに笹藪へと飲み込まれた。訳がわからず、体がもみくちゃにされているうちに、何かに受け止められて落下が止まった。(短編2005:483)
- ・おかしなことだが、その犬よりも同級生のほうが先に死んだ。(薄情:39)

以下の例は、メタ言語表現的な特徴を持っている。

- ・「急な話なんだけど、わたしの仕事、手伝ってくれない？」(短編2005:407)
- ・「しかしあの時は驚きました。亡くなったと聞いた時には、自殺だとは思わなかったですからね。自殺と知った後も、仲間うちであれこれと想像を働かせたものです。殺されたんじゃないかというやつもいました。不謹慎な話ですが。何しろ、あんなものを飲んで死んだんですからね」(聖女:319)
- ・「子供を二人も抱えている男が厚かましい話ですが、正直なところ、女房に死なれてまっています。二年しか経っていないのに再婚考えるなんて、情けの薄い男だと思われるでしょうね」(アイロン:186)

5. 状況語の一部になる場合

時間を表す形式名詞(なか、あいだ、とき、ころ等)を形容詞が修飾している場合、形容詞は被修飾名詞と一緒にあって状況語として機能し、事象が起こる(起こった)状況をさしだしている。このタイプも周遍的なものとして簡単に用例を示しておく。

- ・あの子には、小さいとき大切にしていた玩具がなかったのかしら。今も何もないのかしら。(短編2005:48)
- ・幸世が幼い時に、親子三人で夏休みに海辺の旅館に行ったことが何度かあったが、それも夏休みの宿題の絵日記や作文を書くためで、中学生になってからは家族旅行もしなくなった。(アイロン:175)
- ・先代の社長は若い頃、田舎から出てきた所謂「金の卵」で、建設会社で働いていたらしい。(短編2005:198)
- ・古海先生は昔から体を真っ直ぐにしているのが苦手で、背骨のちょうつがい外れているんじゃないかと思うくらい姿勢が悪い。若い頃に何か大病をしたという話も聞かないから、きっと先天的にくねくねした体つきなのだろう。(アイロン:142)
- ・その老婆たちは若い頃きつと海に潜っていたのだろう、とわたしは思った。(アイロン:151)
- ・「結構です。自由にお使ください。長い間、申し訳ありませんでした」(聖女:247)
- ・長い間この階段を上り下りしたが、これが何段あるのかついぞ数えてみなかったな、とつまらぬ事を考えたのまで記憶している。(薄情:117)

6. おわりに

以上、本稿では、規定語になっている形容詞が、実際には被修飾名詞のさししめしを詳しくしているのではなく、副詞的に機能している場合について、手で拾って集めた小説の用例を整理する形で観察をしてきた。具体的には、「明るい声で叫んだ」のように実質上は修飾語として機能している場合を中心に、独立語の一部として機能している場合や状況語の一部として機能している場合を整理した。その過程で、かなり固定的な表現になっている場合が見られる一方で、臨時的、修辭的な表現も見られることを確認した。

最初に確認をしたように、形容詞という品詞の特徴的な機能は、規定語として名詞のさししめしをより詳しくしたり限定したりするところにあるが、本稿で見たとように実質的には副詞的に機能する場合もあり、特に小説において特徴的に観察される。

最後に、本稿で観察してきたことを、理論的に位置づけるため、第四の品詞である副詞と形容詞の関係について、少し考えておきたい。

Dixon 2010 は、諸言語の形容詞について調べるときに調査しておくべき項目として、「様態副詞として機能することができるかどうか」を挙げている。

25. Can an adjective have manner adverbial function, modifying a verb?

(a) In bare form? (And can noun and/or verb also have this function?)

(b) In derived form? (Does the derivation apply to any other word type?)

If only some adjectives have this property, which semantic types do they belong to?

Dixon 2010: 107

日本語の場合、特に第二形容詞において、「-に」という語形をどう位置づけるかという問題とこの問題は密接に関連している。鈴木(1972)の議論を追ってみよう。

(278) 第二形容詞の文法的な形は、起源的には、名詞の文法的な形から分化発達したものである。現在でも述語になる形は、述語になる名詞と同様、むすびのくつき「だ」「です」をつけてつくられる。規定語にな

る形の「-な」は、古代語の「-なる」にさかのぼることができるが、この「なる」は、古代語のむすびのくつつき「なり」の規定語になる形（いわゆる連体形）である。そして、この「なり」は名詞のに格とむすびの「あり」との融合したものである。「-に あり」→「-なり」（-ni ari>-nari）

（注）この名詞のに格は、一方では、「-に」という形式の副詞に分化するのである。
しずかに・わずかに・はるかに

（鈴木1972：430）

（301）形容詞派生の副詞は、テキストにあるように

第一形容詞	副詞
—i	—ku
第二形容詞	副詞
—na	—ni

である。このうち -ku は第一形容詞のなかどめと同音形式である。この二つは、文のなかでの用法によって区別しなければならない。第二形容詞にはなかどめの形は一つしかなく、副詞のばあいとは形のうえでも区別されている。

第一形容詞	副詞
第一なかどめ —ku	—ku
第二なかどめ —ku-te	
第二形容詞	
なかどめ —de	—ni

（鈴木1972：467）

そのうえで、「ただし、第一形容詞の第一なかどめとみとめられるもの以外でも、形容詞の語幹に「く」や「に」のついたものすべての用法を副詞としてみとめてよいかどうかについては、なお検討を要する」として、次のようなものを挙げている。詳細な議論は原典を参照していただきたいが、ポイントを簡潔にまとめると以下ようになる。

（i）変化をあらわす動詞にかかって、その主体や対象の変化の結果の状態をあらわすもの。

かべを しろく ぬる。

あたりは 雪で まっしろに かわった。

→副詞とみていいだろう

（ii）感情・評価・判断をあらわす動詞にかかって、その内容をあらわすもの。

…を 残念に おもう

…を こいしく おもう

→次の動詞とのくみあわせ全体が合成述語になっている

→形容詞とみた方がいいだろう

（iii）形式的な意味を持つ動詞とくみあわさって、合成述語の要素となる

…を しろく する

…が まっかに なる

…が まっかに みえる

→形容詞とみた方がいいだろう

そして、最後に「注」として次のように述べている。

（注）（ii）（iii）の「-く」「-に」をどう位置づけるかについては、保留とせざるを得ない。第一形容詞のばあいは、これらの「-く」を第一なかどめの用法とみることができるが、第二形容詞の「-に」はそうみることができない。古代語では、「-に」がなかどめ的にもちいられたばあいがある。それを根拠に、これを旧第一なかどめの形式的な用法とみることもしないことはないが。

（鈴木1972：470）

鈴木（1972）の記述が表すように、難しい問題だが、ここで前に引用した Dixon 2010 を参考に、確認しなければならないのは、動詞から副詞への移行のありさまでである。動詞から副詞への移行については、その副詞化の度合いがさまざまであることは鈴木（1972：471）が述べているが、そこで「なかどめ」の形が用いられることは確認しておかなければならない。鈴木（1972）が挙げている語形をいくつか並べる。

くりかえし とりいそぎ おもいきり

[肯定 第一なかどめ]

いそいで ならんで よろこんで あいついで

[肯定 第二なかどめ]

おもわず たえず すかさず のこらず

[否定 なかどめ]

この問題について、現段階では、結論を急がないこととしたいが、本稿で観てきたように、規定語の形容詞が実質上修飾語として機能する場合があることも考慮する必要がある、ということは提起しておきたい。

主要品詞の中でも第三の品詞である形容詞の記述においては、他の品詞の機能を視野に入れた観察が必要であることは間違いはない。筆者は、これまで名詞と動詞の間で揺れ動くさまを中心に形容詞のありさまを

観察・記述してきたが、いわゆる第四の品詞と言われる副詞との関係性も視野に入れた記述が必要な段階になってきている。

[用例出典]

短編2005＝日本文藝家協会編2005『短編ベストコレクション 現代の小説2005』徳間文庫
 聖女＝東野圭吾2012『聖女の救済』文春文庫（初出誌「オール讀物」2006.11～2008.4，単行本2008文藝春秋）
 薄情＝池内紀他編2015『日本文学100年の名作第8巻 1984-1993 薄情くじら』新潮文庫
 アイロン＝池内紀他編2015『日本文学100年の名作第9巻 1994-2003 アイロンのある風景』新潮文庫

注

- 1) この論文の前の段階である八亀（2004）も参照。
- 2) 奥田1983の p. 329 には、次のような記述がある。「すがた，かたち，なり，かっこう，風，言葉，調子，声，目つき，顔つき，態度，笑い，気持ち，心，つもり，表情，手つき，手ぎわ，足どりなどのような状態性の抽象名詞は，なんらかの修飾をともなって，状態規定のむすびつきをつくる。」
- 3) 「おおきい」と「おおきな」，「ちいさい」と「ちいさな」の関係については，鈴木（1972：504）に倣う。

また，この二つの語形の使用実態については，三枝（2015：220）なども参照のこと。

[参考文献]

- 奥田靖雄1983「で格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法連語論（資料編）』むぎ書房 p. 325-338
 工藤真由美2000「否定の表現」『日本語の文法 2 時・否定ととりたて』岩波書店 p. 95-150
 三枝令子2015『語形から意味へ』くろしお出版
 鈴木重幸1972『日本語文法形態論』むぎ書房
 八亀裕美2004「形容詞の文中での機能」『阪大日本語研究』16 p. 51-65 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
 八亀裕美2008『日本語形容詞の記述的研究－類型論的視点から－』明治書院
 Dixon, R. M. W. 2010 *Basic Linguistic Theory Vol. 2 Grammatical Topics*. Oxford U. P.
 Dixon, R. M. W. and A. Aikhenvald (eds.) 2004 *Adjective Classes: A Cross-Linguistic Typology*, Oxford U. P.
 Thompson, Sandra A. 1988 A Discourse Approach o the Cross-Linguistic Category 'Adjective'. in John A. Hawkins (ed.) *Explaining Language Universals*. p. 167-185 Basil Blackwell